

現代絵画の芸術レベル

絵のコレクションを紙上で紹介する意図は、作品を通じて現代ロシア絵画がどのようなものであるかを知つてもらうということにあるわけであるが、それには当然、紹介する作品が現代ロシア絵画に相応しい特徴と芸術レベルを備えていることが前提になる。私自身はモスクワでの経験から自分のコレクションがその当然の前提をクリヤーしていることを知つており、その芸術に感動されたからこそ、現代ロシア絵画の素晴らしさを日本で知つてもらうための手段として同コレクションを活用しようという発想になったのである。

しかし、冷静に論理的に考えてみると、現代ロシア絵画に全くなじみのない人にとってみれば、その判断のベースとなるものが何もないわけで、駐在中に買い集めた絵を勝手に良い絵だと言っているだけのことではないかといった疑問の生じる向きがあったとしても、とりわけ不思議ということではないのかもしれない。そこまで行かないにしても、現代ロシア絵画を代表するような芸術レベルがどのようなものであるかといったことは、読者の方々にとっても大いに興味のあるところと想われる。

そこで、作品紹介の最後になるこの章では、現代ロシア絵画を代表する芸術レベルの水準と言えるような作品を特に選んで紹介することにしたい。

現代ロシア画壇を代表するような芸術レベルの水準がどこにあるかを設定するのは、大変難しい問題であるが、幸い私の手元にはその基準作りに役立ちそうな本がある。それは一九七九年発行の「モスクワの風景画家」というアルバムで、駐在も終り近くになった頃に偶然古本屋で見付けたものである。そこにはソ連人民芸術家十四名、ロシア(共和国)人民芸術家十三名及び功労芸術家五十八名を含めて、総計百九十三名のモスクワの風景画家の作品がそれぞれ一、二点ずつ、画家の年齢順に紹介されている。その全体的な作品のレベルの高さはアルバムからも充分窺い知ることが出来、その時期のロシア画壇を代表する画家のアルバムと見なすことが出来る。層の厚いロシア画壇にあっては、そこに選ばれていないゆえをもって、即第一級の画家でないことの証には必ずしもならないのであるが、その作品の素晴らしさからいっても、人民芸術家と功労芸術家の数の多さからいっても、その逆は真であると言ってよい。

そのアルバムの発行年は私の駐在する十年あまりも前のことであり、百九十三名中六十名ほどの画家は、その八割弱が人民芸術家と功労芸術家であるが、私の駐在した頃には既に故人になっていたことが確認出来ている。また、残りの画家の中でどの程度が、駐在期間中に私の足繁く通った画廊に出展していたのかは知る由もないが、画廊で気に入った絵を集めた結果として、私のコレクションの中にもそのアルバムに紹介されていた画家が七名含まれている。その中の二名は、これまでの章でその作品を紹介しているが、ここでは現代ロシア絵画と言うに相応しい芸術レベルとはどのようなものであるかを見て頂くという別の観点から、改めてその二名も含めることにし、七名の画家の作品を取り上げることにしたい。

これからご紹介する作品が、そのアルバムに選定されている同じ画家の作品と見比べても、充分遜色のないものであるのは言うまでもない。それらの作品を見て頂くことにより、現代ロシア絵画のレベルもある程度は判断出来るであろうし、それと比較参照することに

よって、これまで紹介してきた作品が現代ロシア絵画の芸術レベルをも同じように代表したものであることを、ある程度はご理解頂けるであろう。

また、「芸術家プロ同盟」が公表している芸術レベルについての画家のランキング（格付け）が、画家の評価判断をより客観的に確認するに足る充分な基準であることから、本書にその作品を掲載した画家が十八世紀から現在までのロシア美術史全体の中で、どの程度の評価を得ているのかを示す目的で、そのランキングを巻末の図版目次の右端の欄に参考として掲げることにした。

それゆえ、本題に入る前にその「芸術家プロ同盟」の画家ランキングについて簡単に説明しておくのがよいであろう。

画家ランキング一覧表は、「芸術家プロ同盟」が出版した「統一芸術ランキング」の一部として発表されているものである。ロシア語の芸術という言葉は概念の幅が広く、美術という日本語の訳が必ずしも当てはまらない。芸術家の範疇には油彩画家、線画家、彫刻家のみならず、彫金師や建築家、舞台装飾家や映画監督までが含まれる。そのため二〇〇二年発行の「統一芸術ランキング」（第五版本）は、七百五十五カ所に及ぶ美術館のそれぞれの展示品・所蔵品についての芸術ランキング、油彩画家・線画家ランキング（以降画家ランキングと称す）、彫刻家ランキング、それに画家ランキングに対する最低取引価格のガイドラインから構成されているが、その第六版では建築家ランキングが新たに加わり、また彫金師・映画監督ランキングも「統一芸術ランキング」に補充すべく、現在準備中のことである。

芸術ランキングを設定しているのは、芸術学者・芸術批評家を中心に二十七名のプロ集団からなる「芸術家プロ同盟」付属ランキングセンターである。そのランキング評価の特徴は、（ソ連）ロシア芸術家同盟の称号や名のある賞を獲得していること及び芸術アカデミーの会員であるといった既存の権威を一切考慮することなく、つまり、権威団体や組織の見解に全く影響されずに、純粋に審美的な観点から作品の芸術価値にのみ基づいて芸術家を評価し直し、ランキングしていることにある。「統一芸術ランキング」の初版本は、一九九九年に出版され、その当初から希少本として大きな図書館以外では閲覧不能となっていたが、画家の利益を守り、規範に則った秩序あるロシア国内の絵画販売マーケットを創設するという目的をより浸透させるために、二〇〇三年六月以降第五版本がインターネットで公開されるようになった。本書に掲載した画家ランキングは、その五版本の画家ランキングを必要に応じてインターネットから抽出したものである。現代画家のみならず、過去に遡（さかのぼ）ってロシア美術史全体の中から一万人あまりの油彩画家・線画家を評価対象にしている。ランキングは、上位順に「1」から「7」まで十四段階に格付けされており、「1」は一世紀以上にわたり世界基準の芸術レベルにある画家（従って、現代画家には「1」の評価はない）。「1A」は、一世紀という時間の試練を経てはいないが同様の世界レベルの画家。「1B」は、傑出したオーガナイザー的資質を有するハイクラスの職業画家で、絶対的な需要と人気を誇る画家といった具合に各ランキングの説明が施されている。ロシア語であるが、参考のためにそのサイトアドレスをここに紹介しておくので、興味ある読者は参照されたい（*<http://rating.artunion.ru>）。

* 「芸術家プロ同盟」の画家ランキング一覧表は、二〇〇六年一月以降インターネットサイトで公開さ

れなくなったが、その代わり、二〇一三年二月一日現在の時点では、上記のホームページを通じて、画家ランキング一覧表の電子書籍版を購入することができる。

ちなみに、前述の「モスクワの風景画家」の百九十三名を画家ランキングに従ってランキングした表を下記に掲載しておいた。一九八八年発行の「ソ連芸術家同盟会員名簿」によってその百九十三名を調べ直すと、「モスクワの風景画家」の発行年から九年経過した段階の名簿であるため、称号を付与された画家の数も表の通り変動している。

ランキ ング	ソ連 人民芸術家	ロシア(共和国) 人民芸術家	*ロシア(共和国) 功労芸術家	称号を持たない (ソ連)ロシア芸術家同盟会員
1				
1A	2			2
1B	5			
2A	5	2	5	7
2B	6	3	6	1
3A		4	9	6
3B		6	17	10
4A	1		9	14
4B		1	29	43
5A				
5B				
6A				
6B				
7				
合計	19	16	75	83

* 功労芸術活動家 8 名(「2B」1 名、「3B」3 名、「4A」1 名、「4B」3 名)、
功労文化労働者 5 名(「4A」1 名、「4B」4 名)を含む。

その表で明らかなことは、芸術家同盟の称号とランキングのレベル評価には一定の相関関係が見られる一方で、称号を持たない芸術家同盟会員の画家も称号を付与された画家と何ら変わらない実力者揃いであること、つまり、称号はそれなりの芸術レベルにあることの判断基準を示していると言えるが、無称号であることが必ずしもその逆を意味してはいないということである。また、百九十三名全員の画家が例外なく芸術家同盟会員である上、「5A」以下のランキングの者は誰もおらず、滅多なことでは付与されない功労芸術家の称号を持つ画家の多くが「*4B」になっていることから、芸術家同盟会員であることとランキングが「4B」以上という、このふたつの基準を兼ね備えていることが、一流画家に仲間入りをしていることを客観的に示す指標であると見なして差し支えないように思われる。

*二〇一三年二月時点で「プロ同盟」のウェブサイトを調べたところ、いくつかの注目すべき変更があった。その中で重要な情報と思われるは、まず職業画家の格付けランキング「1－3」を世界レベルの画家と格付けし、「1－3」のランク付けをされた十八世紀から現在までのロシア美術史の画家全員と、それと同じ画家ランキング「1－3」の芸術レベルの基準で選んだ十八世紀から現在に至るロシア以外の画家の双方を合わせ、総計一萬一千五百名余りの国際画家ランキング一覧表を公表したことである。第二の重大情報は、国際画家ランキングの創設と密接に関連するが、ロシアの画家ランキングに、「1」は生存している画家には付与されず、「2－4」は五十歳より若い画家には与えられない等の年齢制限が導入されたとであろう。言うまでもなく、これはとりわけ、ランキング「4」以上の格付けのハードルが高くなり、より厳格になったことを意味している。

これに関連して、私自身は、国際画家ランキングは言うに及ばず、画家ランキング「4」の芸術レベルにも注目している。何故ならば、「1－3」の画家に比べると人数が格段に多く、いわばロシア絵画の芸術レベルを代表するランキング「1－4」の中で画壇の屋台骨を支える存在であり、それだけにその芸術レベルはロシア絵画全体の芸術レベル水準と層の厚さを左右するほど極めて重要な位置づけにあるからである。そして、そのランキング「4」の芸術レベルはと言えば、私の経験からしても、「すごい絵だ」と思わせる芸術レベルにあって、「1－3」の画家が「プロ同盟」により世界レベルと規定されたことをもって超一流の画家とするならば、「4」の画家は一流と呼ぶことができるほどのものなのである。ランキング「4」の芸術レベルがそのように高いことは、いずれ「1－3」のランキングに移行する予備軍がたくさんいることを意味するに他ならず、それは何よりも、ロシア画壇全体の活動レベルが大変健全な状態にあることを象徴している。

本書にその作品を掲載した画家にその基準を当てはめると、図版目録右端の欄に示した通り、二十六名の画家のうち、*十九名がその基準をクリヤーしている。残りの*七名は、第五版「統一芸術ランキング」の評価対象に入っていないため、そのランキングは不明であるが、第七版では評価対象の画家は、二万人あまりに増えており、その後も補充されていくであろうから、残りの画家の多くも、同じような芸術レベルの画家であることがいざれ分かる時がくるであろうと期待している。

それはさておき、七割強の画家が右に述べたふたつの基準をクリヤーしているのが明らかになったことにより、これまでその作品を掲載してきた画家がこれから紹介する画家同様、現代ロシア絵画を代表したものであることをより客観的に提示するという目的は、ある程度は達せられたと言ってよいと思われる。

* 本書の発行から三年あまりの二〇〇九年一月に本書掲載の画家の最新のランキングにつき「芸術家プロ同盟」ランキングセンターに問い合わせを入れた。返事を頂いたそのランキングは、巻末の図鑑目録右欄に掲載している。その右欄のランキング左横に → のついたものは、問い合わせ時点の更新された評価を示し、また、二〇一三年五月時点でチェックした最新の評価についての変動は、ランキング左横に ⇒ をつけて表示した。評価の左側に → または ⇒ のないものは、評価に変化がなかったことを意味している。評価の下がった画家も若干いるが、元々力のある画家であるので、それほど心配はしていない。

前置きが長くなつたが、先に進むことにしよう。



図版 32 M.A.スーズダリツェフ(1917－1998)

ロシア芸術家同盟会員 ロシア功労芸術家 ソ連国家賞受賞者

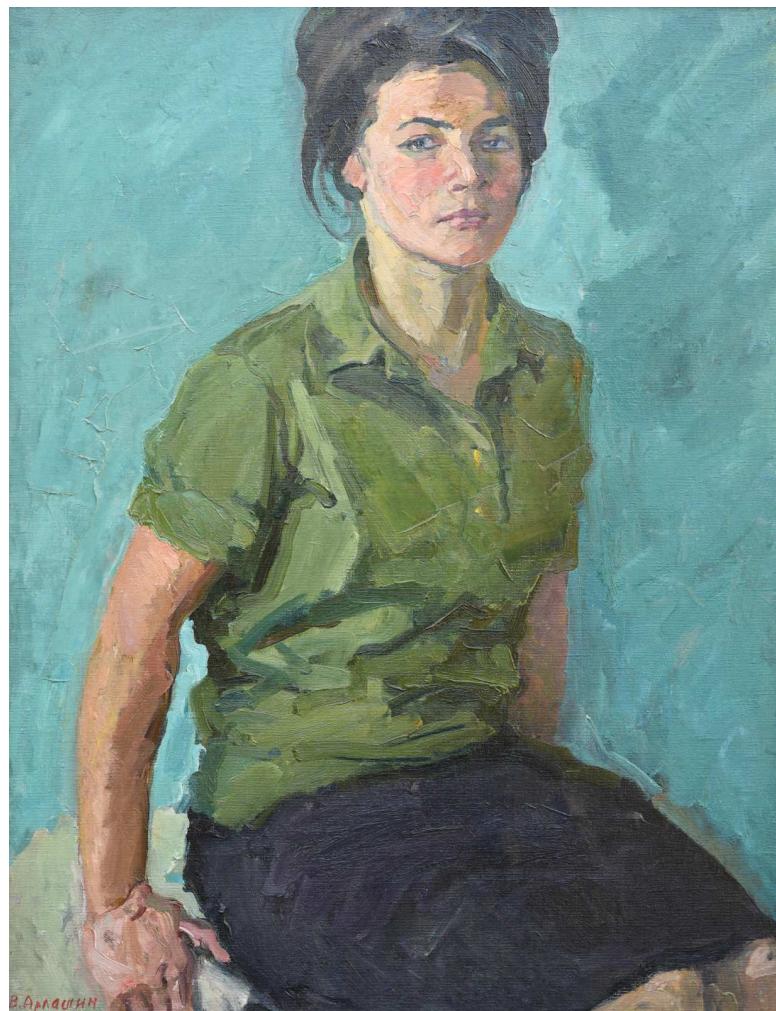
「朝」(制作 1992 年) 油彩・画布 50 x 70 cm

「朝」(図版 32)は湾曲した川の水量豊かな流れを背景に、秋の黄金色に染まった落葉樹の茂る土手で馬の親子が草を食んでいるといった川辺の朝の光景を描いた作品である。

この絵は功労芸術家が描いただけのことはあって、その表現内容が頗(すこぶ)る充実していて、絵のサイズ以上の大きなスケールを感じさせる。曲がりくねって流れくる川面は、実際に水量豊かな川が勢いよく躍動しながら流れているように表現され、その動きのある描写のリアルさに思わず目が吸い寄せられる。それは朝まだきのどんよりと単調な空と対比されて、より躍動感が強められて見え、また、遠景・中景・前景に配置された木立のそれぞれの位置と色合いの違いは川の流れに呼応したリズムを感じさせ、広い流域空間を遠景より前景へと右から左に回り込んでどんどんと流れくる水流の勢いを高める効果をも担っている。

この作品の優れたところは、そうした川面の表現描写の素晴らしいと共に、ひんやりとした温度感をもって描かれた、翳りのある光と空気の表情に、題名通りの「朝」の雰囲気が良く出ていることであろう。

「乙女の肖像」(図版 33)は私のコレクションの中では唯一の肖像画である。ほかに優れた肖像画に出会わなかったのかと言えば、そういうわけではなく、食指の動いた作品は二、三あったのであるが、肖像画というのは身近な人か、あるいは作家や音楽家等の、敬愛す



図版 33 V. A. アルラーシン(1923 – 1998)
ロシア芸術同盟会員
「乙女の肖像」(制作 1967 年) 油彩・画布 100 x 90cm

る特定の著名人といった何らかの近しい繋がりがないとあまりそばに置こうという気になれないものである。

にもかかわらず、この「乙女の肖像」を手に入れたのは、健康そうな乙女の中に、ある種の普遍的な美を見出したからであり、また、絵そのものが優れていたからである。乙女は背もたれのない椅子に左横向きに腰かけ、背筋をぴんと伸ばして顔はこちら正面を向いているが、その容姿は健康的な若々しさに溢れている。誰もが即座に認める美人というのではないかもしれないが、それなりに美しく、襟元からまっすぐ伸びて頭部を支える長めの頸はその美を引き立てている。

この作品を初めて見た時、正直言って彼女が農村の娘さんのように思われ、何とはなしに、バービエ・リエタという言い回しを連想したのである。初秋の小春日和をロシア語でバービエ・リエタと言うが、そのバービエとはバーバ(既婚の農婦)の形容詞中性形で、その言い回しを逐語的に訳せば農婦の夏という意味なのである。なぜ小春日和の表現に農婦

が引き合いに出されるのかと言うと、長くは続かない夏のぶり返しを、畠仕事のために身仕舞いにかまける暇がなく、女盛りが早く萎んでしまう既婚の農婦に喻えているからである。近年は農村の生活も改善されて、昔言われたようなことは必ずしも当てはまらないのかもしれないが、そういった傾向も多分に残っているのであろう。

私がそんな言い回しを連想したのも、バーバという単語をバービエ・リエタと結び付けて覚えていたからで、実際絵には私の印象を裏付けるように、彼女の飾らない素朴な顔立ちや若い娘さんとしては頗る地味な服装とその緑色の無地の半袖ブラウスから剥き出た日焼けした腕や仕事になじんだ手の機敏な表情が描かれ、彼女が田舎住まいの可愛らしい娘さんであることが窺える。きっと彼女の周りには都会に比べると女盛りが早く褪せてしまう農村の生活があつて、画家はそんな農村の結婚前の乙女の健康と若さに支えられた美しさを普段着の彼女の中に認め、それをいとおしんで肖像画に留めたのであろう。

椅子に添えられた手の生きた表情や骨格と筋肉の仕組みにしっかりと支えられていることを想わせる安定感のある上半身のデッサンとその光処理の理に適った巧みな表現描写はさすがであり、背景の壁紙の濃淡のある色合いの描き方を含め、画家の行き届いた表現上の配慮がこの作品の芸術レベルをより高いものに仕上げている。

「カムチャツカの開港～聖ピョートル号と聖パーベル号」(図版34)は、私のコレクションの中では二番目にサイズの大きな作品である。ペトロパヴロフスク・カムチャツキーの開港当時の港の風景を描いた歴史画で、私の所蔵する唯一の歴史画でもある。その開港は、海洋探検家 V・I・ベーリングが二回目のカムチャツカ探険のためその地で越冬した一七四〇年と言われ、十六世紀以来コサックを先兵隊としてシベリア進出が行われた結果、極東の海の出口のひとつとして、その年、そんな遠隔の地に港が開かれたわけである。

絵には見ての如く、港の静かな入り江を二隻の大型帆船が帆を立てて緩やかに航行している情景が描かれているが、それはロシア海軍の旗を掲げたその時代の軍艦で、ベーリングが第二回目の探検に使用した聖ピョートル号と聖パーベル号にはかならない。背景の海岸線を形成する隆起した丘の背後に聳える雪に覆われた高い山は、海拔三四五メートルの大カリヤクスキ火成である。時季はベーリングが探険に赴く直前の六月初旬と想われ、背後の空や山が日を受けて明るいため、翳りの中で描かれた前景の波止場では、まだ肌寒いとみて、数人の兵士が焚き火を囲んで暖を取っている。

この絵の焦点は言うまでもなく、画面手前の軍艦にあり、力を込めて重量感豊かに描かれている。帆や船尾には日の照らす方向からすると不自然に思える光がスポットライトのように当たっているが、それは軍艦を絵の焦点に据えるにはどうしても光を当てて目立たせる必要があったためであり、自然な光処理法を犠牲にしたその描写に軍艦の表現の重要性にこだわった画家の苦心の跡が窺われる。この絵をじっくりと鑑賞するにつれ、明るく日の当たったその軍艦の、梃子でも動じないといった、どっしりした重みの表現の中に、画家の思い入れのようなものを感じ取ることが出来、私にはそこに十八世紀のその時代に早くも太平洋への進出拠点を開港したベーリングの偉業と、探険を命じたその時代の國の為政者の先見性に対する画家の誇りや敬意といったものが込められていると想像され、そこにこの歴史画を描いた画家の動機を見る思いがするのである。その艦船の存在は、構図



図版 34 V. T. ダヴィードフ(1923 – 2007)
ロシア芸術家同盟会員 ロシア功労芸術家
「カムチャッカの開港～聖ピョートル号と聖ペーベル号」(制作 1991 年)
油彩・画布 100 x 130 cm

上、この絵を引き締めて密度の高いものにし、また、その艦船の位置と大きさや色合いは背後の焦げ茶の小高い丘や日を受けてピンク色に輝く、雪に覆われたコニーデ型火山とよく調和して、光の陰影に富んだこの絵の美しさや歴史的雰囲気を高める役を果たしている。

「苺」(図版 35)は心持ち上から見下ろす視点から描かれた果物の静物画である。黒い小さなテーブルに、所狭しと果物やそれを入れた器やタオル、絨毯の小マットが置かれていて、その情景が光の照らす中で色鮮やかに再現されている。器に盛られた苺や林檎、すぐりやそれぞれの器等は、それらの実物が持つ肌触りや色合いがリアルに表現されている。特に、絵の題名でもあり、その焦点にもなっている苺は小粒ながら、立体感豊かにひとつひとつ丁寧に描写され、日を浴びて鮮やかであると同時にえも言われぬ、柔らかなその赤の色調は、目にとても心地よく映える。

この絵の非凡な点は、単に静物だけでなく、それと共に溢れるような光が大変質感豊か



図版 35 R. S. ザトウローフスカヤ(1924年生まれ)
ロシア芸術家同盟会員
「苺」(制作 1991 年) 油彩・画布 40 x 50 cm

に再現されているところであるが、それは言うまでもなく、明るく鮮やかな色彩と明確な輪郭をもって静物をリアルに描写することで実現されており、その表現を見ればこの絵が大家によって描かれたものであることがすぐに解るであろう。この画家には女流画家としては珍しく、描写の色合いに強い力感があるが、その素晴らしい表現は、描く色合いに力があつて初めて可能なものである。

ところで、この作品には絵の出来映えを高めるための画家の細かい配慮が幾つか施されている。苺を入れたやや深底の平たい木の器は、絵の焦点に相応しく、中がよく見えるように後ろの底の部分に物をあてがつて傾斜させて置かれ、そのそばには木の器に調和させて柔らかい雰囲気を出すためであろうか、白ではなく、クリーム色のタオルが置かれている。また、暖色系の多色織りの絨毯マットは、苺を盛った土器が暗色系であるため、その部分に明るさを加えて絵全体の色調バランスを整える必要から色や大きさを選んで意図的に置かれたものである。画家の筆の力量とその熟練した配慮が、明るく色彩バランスに優れたこの完成度の高い作品を生み出したと言うことが出来る。この絵を近くで見ると、すぐりを入れた皿は使い古した物に見え、タオルは少し薄汚れたような感じがするが、距離を取つて見ると、どっこい、そういった感じは払拭されて、皿は磁器の質感が現われ、タオルはふっくらとした立体感が出る。この絵は小振りの作品であるが、その描写の色合いには優れた絵に共通の、バランスの取れた輝きと深い透明度が感じられる。



図版 36 P. P. オソーフスキー(1925 – 2015)

ロシア芸術家同盟会員 ソ連人民芸術家 国家賞受賞者

「静けさ」(制作 1993 年) 油彩・画布 73 x 73 cm

「静けさ」というこの題名の作品(図版 36)は、二回目のモスクワ駐在時に頬髯と顎鬚を生やした画家の友達から作者を紹介されて、その画家のアトリエに行って選んだものであった。画風がこれまで紹介してきたリアリズム絵画と異なることと、現代ロシア画壇の中枢を占める画家の一人によって描かれたものであったことから、注目度が高いことを考慮して本稿に特別に加えることにし、その画家の作品がこの章の冒頭で述べた「モスクワの風景画家」に載っていたところから、この章で扱うこととしたものである。

この絵は、見ての如く、なかなか不思議な魅力を備えた作品である。細部を省いて簡潔明快に描写されたその画面は、水彩画を見るような柔らかな透明感に溢れ、そこにはどつしりした実在感と魂が洗われるような静かな安らぎが表現されている。雲間から射す光は、この画家のロマン主義的傾向を指摘されるもののひとつであるが、克明且つリアルに力を込めて描写され、それは、この絵全体の美しさを引き立て、その美に神秘的な彩りを添えている。揺るぎない湖面に姿を映すボートの静かな佇まいの表現は、この画家独特のものであり、際立った自然美を背景にしたボートの存在感は、この作品でも一際目を惹く。

私もそれまでに画廊等でそれなりの数の絵は見ていたが、このような画風の作品に接したのは、初めてのことであった。画家の友達が、「もし興味があったら」と最初に置いていたこの画家のアルバムを開いて、その画風の新鮮な魅力に眼を見張った。どこにその

魅力の秘密があるのかと子細に見ているうちに、作品から受ける印象がある意味で似たところのある画家として思い浮かんだのが、アルベール・マルケであった。

マルケは、「フォーヴィズム」に属するフランスの画家で、日本ではマチスの影に隠れてあまり目立つ存在ではないが、ブーシキン美術館とエルミタージュ美術館には彼が巨匠であることを証明する幾点かの傑作が、それぞれ常設展示されている。そのほとんどの作品は、運河や湖のある街の風景画であるが、絵全体を少し簡略化して大まかに捉えながらも、要所はリアルに押さえるその画法には、穏やかな雰囲気の中にえも言われぬ実在感があり、そのためロシアでは、彼のファンは多いのである。

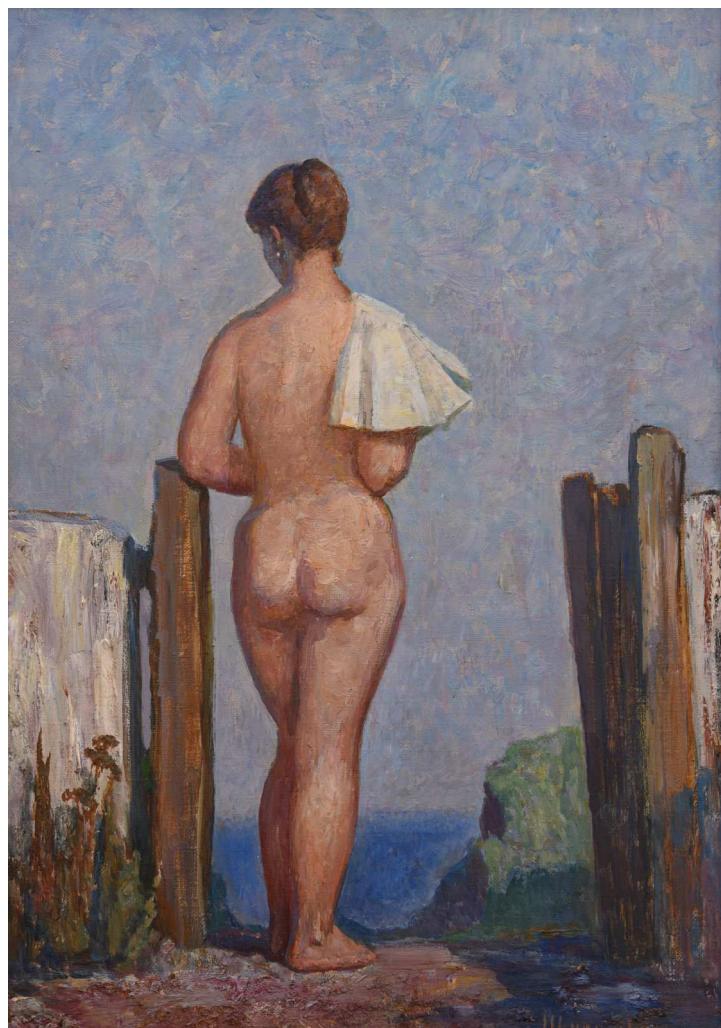
私がオソーフスキイのアルバムを見て、マルケの絵を連想したのは、彼の作品が、全体にリアリズムを一步踏み出したような簡潔な表現で描かれ、そのためリアルな描写の力点がかえって引き立ち、実在感が一層増して見えるという点に共通項を見たからであった。確かに画法からくる絵の表現効果という点では、オソーフスキイとマルケは似たところがあるという私の指摘は、大きく的を外れたものではないように思われるが、その画風や絵の意味合いは、無論、異質のものである。

この「静けさ」は、オソーフスキイの特徴がよく出ている作品である。実風景であると同時に、空と大地と水は画家のこよなく愛する祖国を象徴しており、贅肉を極限まで削ぎ落として本質のみを描いたかのようなその表現描写には、画家の哲学的な思惟が込められていることが感じられる。彼の作品に繰り返し現われるモチーフであるボートは、絵に占めるその存在感の大きさから、人の手で作られた建造物という意味合いが強調されているように思われる。それは、背後の空から神の啓示のように射しこぼれる光に照らし出された美しい自然に対置されて、絶妙な調和を創り出し、自然美と静けさを一層引き立てたものにしている。その構成表現の中にキリスト教的な宗教観を見出すのは私だけではないであろう。画家の観照から描かれた風景画と言え、ロマン主義的色彩の強いその独特的の画風に、強く惹かれる鑑賞者も少なくないと想われる。

「朝」(図版37)は題名の通り、朝の清々しい雰囲気の漂う裸婦画であるが、眼下の海へと通じる専用の道が庭の木戸から開け、そこを下って泳ぎに赴かんと、タオルを右肩にかけた裸の若い女性が後ろ向きに庭の木戸に佇んで、何やら海を見下ろしているといった光景が絵には描かれている。裸婦のその後ろ姿は明るい開放感に溢れ、裸婦を見ているという氣後れを少しも感じさせないところが気に入って、衝動的に買い求めた作品であった。

戸外のヌードの描かれた絵は画廊で何点も見る機会があったが、そのほとんどが自然に囲まれた川辺に立つ裸婦を表現したもので、自然の中に付加的に添えられたといった感じがし、なぜそこに裸婦がいるのか理解に苦しむような絵もあったりした。女体の芸術美を表現するには、周囲の自然に圧倒されていかにも中途半端という感じで、焦点がぼけてしまるのは否めない。

恐らくこの画家は、そういった点を充分承知の上で、思い切り良く裸婦の美しさに焦点を当てて、この作品を描いたのであろう。その表現描写には周囲の自然に負けない工夫が施されている。リアリズムとは異なる描写法で描かれたその後ろ姿は一種のフォルマリズムとでも言ったらよいのであろうか、輪郭が戸外の光の陰影をほとんど反映させることな



図版 37 L.S.シシパチョーフ(1926－2001)
ロシア芸術家同盟会員
「朝」(制作 1992 年) 油彩・画布 82 x 58 cm

く色濃く縁取られていて、その描写には強い実在感と安定感が感じられる。この絵を見ていると、まず先に安定感のあるフォルムと色合いで裸婦像が描かれ、回りの情景はその裸婦の美しさにさわやかな雰囲気を添えるために後から付け加えられたといった印象があるのであるが、実際、裸婦の背中から頭部にかけての美しさは、背景の表情のある高い空のために一層引き立ち、爽やかな空を背にしたその左横顔は彼女が美人であることを想わせる。ディテールを省いて描いた自然描写に物足りなさを感じなくもないが、リアリズムとは異なるアプローチで画家の意図した効果を上げており、その熟練した技量は絵から充分感じ取ることが出来る。

「非黒土の道～リュームニコヴォ村」(図版 38)は、私のコレクションの中では例外的にやや暗めの作品である。この画家の作品は駐在期間中に非売の展覧会を含めて何点か見る



図版 38 G. A. シイソリヤーチン(1936－2010)
ロシア芸術家同盟会員
「非黒土の道～リュームニコヴォ村」(制作 1991 年)
油彩・画布 45 x 120 cm

機会があったが、やはり少し暗めの色調で描かれ、それがこの画家の色調バランスの特徴でもあるらしい。にもかかわらず、表現内容の方はその暗さを補ってあまりあるほど充実していて、そのことはこの作品にも当てはまるのである。そこには横長の広い視界の大きな構図の中で、荒れ果てた野原とその背後に遠景の景色から立ちはだかるように立っている一群の黄葉した木々や、画面左の視界の開けた所から見えている湖や、その向こうに果てしなく広がる風景が、ところどころ晴れ間を覗かせて白い雲を浮かべる空を背景に、男性的な力強いタッチで描かれている。

この絵の題名になっている道は、原題(ロシア語)では複数形で表示されているので、野原にトラックが残していくつもの轍を指しているのであろう。それが木々の群の右側に見える道に繋がり、湖の対岸の先の少し盛り上がった地形に耕作地が見えているところから、どこかその近くにでも在るリュームニコヴォ村へと続いているものと想われる。遠景を遮る位置に立ちはだかって、目立つ存在の一群の木々は特徴のある筆致で描かれ、見慣れてみると、その描写には目に心地良いなかなかの魅力が感じられる。それは私には舞台を隠す幕のような役を果たしているように見え、村は湖の対岸の木々に遮られた辺りにあるのではないかといった想像に誘われる。

この作品の優れたところは野原の表現にあるが、距離を取ると、野原の奥行きがぐっと広がって、絵のサイズが倍以上も大きくなつたように見える。不思議なことに奥行きが出るのはこの野原だけで、ほかはほとんど変化はないが、その中で驚くほど雄大で荒削りな野原の情景が生き生きと展開することからも、画家の労力の多くがこの野原の表現に費やされ、また、その表現を最大限に生かすという見地から視界の広い横長のサイズの画布がわざわざ用いられたということが解る。野原は不毛の土壤ゆえの休耕地でもあるのであろうか。その泥濘の中で車輪にえぐられ、土のめくれ上がった凸凹した地表と苔のような丈のない草の重く沈んだ深みのある色合いに、放置され顧みられないといった野原の荒涼感が表現されている。野原が荒れすさんで描かれているだけに、それはいきおい、手入れの

行き届いた遠景の日の当たる耕作地や牧歌的な雲の浮かぶ鮮明な空の美しさと対比され、この絵を見る者に、村のある湖の向こうに行けば、何か良いことがあるかもしれないといいうような気持を起こさせる。画面には見えない「リュームニコヴォ村」が、そんな期待を持たせる雰囲気の中で表現された絵と言えるであろう。